

# The Boston Globe

## 堅牢な精神がグローズヌイを導く

原文：[http://boston.com/bostonglobe/editorial\\_opinion/oped/articles/2007/11/14/a\\_determined\\_spirit\\_guides\\_grozny/](http://boston.com/bostonglobe/editorial_opinion/oped/articles/2007/11/14/a_determined_spirit_guides_grozny/)

ルース・ダニーロフ 2007年11月14日

グローズヌイ

最近、挑戦的な態度がグローズヌイを支配している。それは、あたかもクレムリンに対してこう言っているかのようだ。そう、お前たちは戦争に勝利した。チェチェン人の15%を殺し、我々を世界中に難民として追放した。そして今でも我々を好き勝手に逮捕することができる。だが、お前たちは決して我々の精神をくじくことはできない、と。

私は、最近グローズヌイを訪れるまで、12年におよぶチェチェン戦争の報道写真にある瓦礫の山のような光景を思い描いていた。ところが、グローズヌイで私が目にしたのは、瓦礫の山ではなく、再建中の家々だった。その中には、豪華なレンガで覆われ、中庭に通じる洒落た門を備えた豪邸のような家まであった。道路は再舗装され、グローズヌイの空港も再建されていた。トルコ人たちが、世界最大のモスクの一つになるに違いないほど大きなモスクを建てている。ロシア正教会が修復され、ユダヤ教会も建設される予定である。

市長の執務室にいたアシスタントの一人は、「こうしたことがすべてこの一年間で起こってきた」と言う。信じがたいことだが、私が大通りを運転している間にも、小さなカフェと美容院が開店した。それは、クレムリンがチェチェン戦争を終わらせた功績を世界に見せつけるために特別にあつらった「展示品」には違いない。

けれども、グローズヌイに10日間滞在したことで、私は断言できるが、チェチェンの首都はポチョムキン村ではない。戦争による荒廃を乗り越えて、チェチェン特有の活力が戻ってきている。もはや爆撃を受けたり、砲弾の破片に襲われたり、弾痕のある壁を見たりすることもなくなり、人々の気分も高揚している。たとえ、流血の戦争や、失われた家族のことを忘れるまでに何年かかかるとしても、整形後のグローズヌイは、人々の精神を鼓舞し、ごく普通の生活に再び戻れるという希望を与えてくれている。

あたかもチェチェンが正常化したことを強調するかのように、頭にスカーフを被った若い女性が、13センチのヒールを履いて、ジッパーやチェーン、安全ピン、銀のボタンで飾り立てられた光沢質の黒のミニスカートを身にまとい、深い穴の開いた道を通り過ぎていく。男性は、鏡に使いそうなほどきらびやかで、爪先の尖った黒い靴を履いている。

誰もが、チェチェンを復興させた31歳の大統領、ラムザン・カディオロフを評価している。チェチェン人は、まさにロシア人がウラジーミル・プーチンを評価するのと同じように、カディオロフを評価しているのである。カディオロフは、物事をなしとげるために、治安を強化してきた。彼は、命令に強制的に実行するために、子分たちにノルマを課している。民主主義のことなど頭にない。

チェチェンの復興費用がどこから流れてくるかということは、ちょっとしたミステリーである。私が話をしたチェチェン人は、グローズヌイ市長のムスリム・フチエフを含めて、誰もが口を揃えて言うことには、資金の大半は裕福なチェチェン人とカディオロフ基金から流れてくるという。カディオロフは、裕福なチェチェン人マフィアから、盗んだ金を無理やり没収している。今のところ、ほとんどのチェチェン人は、カディオロフ大統領を覆う個人崇拜を多めに見ようとしているようだ。

あとどれくらいの間、自由であることをつねに誇りにしてきたチェチェン人が、カディオロフの圧制を受け入れていられるかはわからない。人権侵害は今も続いている。失業率は80%にも及ぶ。驚異的な復興の影には、チェチェンの伝統的な家族の絆が解決できない社会的問題が潜んでいる。今のところ、人々は楽観的になっているが、カディオロフにその他の深刻な問題を解決する技量がなければ、チェチェン人の忍耐は擦り切れてしまうかもしれない。

グローズヌイ第9私立病院では、歯科医が両親を診察していたが、その間、天井からは雨水が滴り落ちていた。狭い部屋は整頓され、清潔に保たれている。イスラム教徒のチェチェン人は、伝統的に綺麗好きなのである。その一方で、歯医者には、老朽化した代用品を治療器具に使っている。黄緑色の壁をした廊下の前に、患者が列をなして順番を待っている。照明は切れており薄暗い。医師は、首の後ろにソーセージのような突起を持つ子どもを診察した。母親は、子どもの上着を脱がせながら、その突起が生まれつきのものだと語ってくれた。「こんな症状は見たことがありません」と、医者は目を見開いた。

「ロシアの中で最も出生率が高いのがチェチェンです」と医師は言う。「爆撃を受けていたときでさえ、チェチェンの出生率は上がっていました。個人的な感覚では、20%から30%ほど上がっていたと思います。人口の減少を補うためです」

チェチェンの人口は再び増加するかもしれない。けれども、PTSDと環境汚染のために、チェチェン人の中には先天性の障害を持つ子どもの割合が増加している。グローズヌイ小児科病院の医師の説明によると、10人に1人の子どもが、治療を必要とする何らかの異常を抱えて生まれてくるという。

両親が裕福であれば、子どもは隣国のダゲスタン共和国に送られて、チェチェンよりもわずかによい治療を受けることができる。チェチェンの病院にはほとんど診断設備がなく、超音波装置もなく、遺伝病の専門家もいない。縫合に使う器具にありつける医師は、まだしも幸運である。ソ連時代に作られた医療専門家の社会的ネットワークも消滅し、それに代わるものもない。

現在、チェチェン人は、都市に溢れる「ホリー・トリオ」の写真を見ては冗談を言っている。現在の大統領の父親であるアフメッド・カディオロフは暗殺され、息子のラムザン・カディオロフはチェチェンの独裁者になり、ロシアのウラジーミル・プーチン大統領はチェチェンをチェチェン化することに成功した、と。

ラムザン・カディオロフが、自らの人気と権力に溺れて、以前のように自己抑制ができない性格に戻ってしまう危険は今でもある。カディオロフにちょっとした個人的な欠点があること—超高級外車を持ち、ライオンをペットに飼い、豪邸に住み、妻が何人もいること—は有名である。

一方、チェチェンには約5万人のロシア軍兵士がおり、空港や検問所、ハンカラにある巨大な軍事基地に、目立たぬよう駐留している。チェチェンに派遣された血色の悪いロシア兵士は、自分たちがチェチェン人からどれほど軽蔑されているかを知っているため、目立たないようにしている。もしも深刻な騒ぎが起こったら、それを鎮圧するように命じられることを、彼らは承知している。そのことはチェチェン人たちも理解しているため、今日の安定が危うい平和の上に成り立っていると感じている。

訳：植田那美

筆者のルース・ダニーロフは、モスクワ特派員を務めたこともある米国マサチューセッツ州ケンブリッジ在住の婦人ジャーナリスト。チェチェンの子どもたち国際委員会（ICCC）の創立メンバーであり、夫のニコラスと共に、チェチェン人外科医ハッサン・バイエフの半生を記した感動的な著書、「誓い チェチェンの戦火を生きた医師の物語」の共著者として知られる。